
兄妹

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄妹

【著者名】

鈴蘭

NZP-1

N8299N

【あらすじ】

「ほんとうのこころ」の続編です。蘭が小さくなつて新一が子供のお世話を学ぶという感じの作品です。一部、新蘭、平和、快晴になっています。どんな方でも楽しめると思いますので…。これは続編ですので、先に「ほんとうのこころ」を読んだほうがいいと思います。

上藤蓮華（繪畫家）

続編ですかので、ちよつと寂なところがおぬし用こまか。

「お兄ちゃん、私の学校は?」

「確か…帝丹小学校だったな…おれの母校だな。」

「お兄ちゃん、料理できないでしょ?また、作ってあげる。」

「へいへい。」

「はいは一回とさりげんとすること。」

「すみません」

「よろしく」

小学一年生の少女と高校一年生の青年。

ここ、工藤邸ではこんな会話があつた。

そこに、茶髪の高校2年生の女子が勝手に入ってきた。

「工藤君、妹さんの名前だけど…」

「蘭、だろ?」

「ちがうわ。一ヶ月間の間だけ、違う名前にしてほしこの。」「

「なんでだ?」

「仕方ないわ。とにかく、この世に工藤蘭は存在しないということ

で、工藤…そうね、なんて名前がいいかしら?」

「おこ、蘭。なんて名前がいい?」

「そうねえ…蓮華がいいな。」

「蓮華…か。いいぞ。」

「お兄ちゃんは新一でいいの?」

「ああ、そうだよな?」

「ええ、もちろんよ。」

三人の会話は冷めているのかあきれているのか分からぬような会話だった。

「あと、毛利蘭つていう人がいるんだけど、その人はあなたの恋人よ。でも、少しの間だけ、この日本にはいないのよ。だからもし、誰かに蘭のこと聞かれたら今はいないうて言つてね。」

「ああ、わかった。

「あと、蓮華ちゃん、工藤君が何か変なことでも言つたら厳しく叱つてあげて頂戴。」

「はい！」

蘭
しゃ蓮華かかわしい声をあけて言ふ

その声は新一はやさしいほほ笑みを蓮華は向けた

二十九、國立新嘉坡植物園黑頭翁
二十、一歲半

「ジイジ、イ！」

「じゃあな。

新一と蓮華が志保を見送ると、志保は大きな音を立ててドアを閉め

た。

「蓮華、朝飯。」

一何よ、偉そう

2人はこんな会話をしながら蓮華はキッチンへ、新一はソファへ行き、本を読み始めた。

そんな静かな時だつた。

大きな長い声が工藤邸に響き渡った。

そして

ドタバタと大きな音の足音がリビングに向かってくる。

「へ？」

「は？」

リビングにいる新一とキッチンにいる蓮華が2人して驚いたようなまぬけな声を出した。

バタンッ

またしても大きな音がロビングのドアを開けた。

「し、新一君！ 蘭は！？」

「えっと、蘭は…」

志保の言葉を思い出す。

しかし、園子には事情を話すと言っていたので、本当のことを持つてもいいと思ったのか、蘭が蓮華になつたことをすべて話した。

「それで？ 蘭、蓮華ちゃんはどうにいるわけ！？」

「キッチン。もしかしたら、おまえの記憶、ねえかもな。」

「蘭！ 蘭！ …！」

新一の言葉を聞いたのか、園子は急いでキッチンへと向かった。迷いもせず向かつたキッチン。

そこには、かわいらしい小さい頃の蘭がいた。

「蘭…」

「…園子…」

「蘭…呼び捨てに…」

「お姉ちゃん…？」

「ガクツ…」

呼び捨てで呼んでくれなかつた蘭に園子はガクツと頃垂れた。

「園子お姉ちゃん、どうしてここに？」

「蓮華…ちゃん、あなたは、上藤蘭…ね？」

「そう…・・・だよ？」

「なら、あなたは蘭でいいのね？」

「どうしたのさ、みんなで。」

「いいの、いいの。こっちの話。」

「おかしいね、そこに隠れてるんでしょう？ 和葉お姉ちゃん、平次お兄ちゃん、青子お姉ちゃん、快斗お姉ちゃん…じゃなくてお兄ちゃん。」

蘭がキッチンの柱に隠れてる四人を呼んだ。

そして、見事に四人いた。

「あんな、蘭ちゃん、俺は、お姉ちゃんじゃないぞ？ お兄ちゃんだ。」

「だって、いつもお姉さんのカツコシに私やお兄ちゃんに余っこに来るじゃない。」

完全に子供の蘭。

女子群は可愛いと思い、男子群は頃垂れている奴もいれば感心している奴もいた。

「蘭ちゃん、ほんま可愛えなあ！」

「ほんとほんと…青子と大違い。」

2人は嬉しそうに見ていたが、園子は怒りに震えていた。

「たしかさあ、これ作ったの志保だつたよね？」

怖い声を出して窓から見える阿笠邸を睨む。

その様子に蘭はビクッと肩を震わせた。

「志保お姉ちゃんが…どうかしたの？」

「あなたの体を…！…！」

園子の説明を後ろにいた志保が口を手で覆つた。

「園子、私を憎んでるみたいね。」

「はたまへでひょ！ひやんをひいはくひはんはから！」
(正しくは「当たり前でしょ！蘭を小さくしたんだから…」です)

「何言つてるのよ…」

志保はあきれ半分で園子を離した。

園子は息切れしたらしく、息が荒かつた。

「志保、私を殺す気！？」

「そうね、そのほうがよかつたかもね。」

「志保おおおー！」

「冗談よ。」

冗談とは見えないそぶりで蓮華に近づく志保。

「蓮華ちゃん、阿笠邸に来てくれるかしり？」

「阿笠博士、いる？」

「もちろんよ、そのために呼んだんだから。」

「おい、何の騒ぎ…はあ！？」

新一がやつとキッチンに来たが、志保、園子、平次、和葉、快斗、
青子が勝手に入つて居るといつことで新一は驚きと怒りを隠せない
様子だった。

「お前ら…勝手に…」

「ええやんけ、俺ら親友やう？」

「新一、そつやつて怒るから私が嫌いになるのよー！(蘭の声)」

快斗が蘭の声を使つてしまふことにより、新一の頭にある火山
は噴火した。

数時間の男の悲鳴が工藤邸に響き渡る…

工藤蓮華（後書き）

誤字脱字、教えてください。
感想待つてます。

帝丹小学校にて

「はーい、みんな、今日から新しいお友達が来てくれます。女の子です。」

小林先生はそういうなり、黒板に「工藤蓮華」と書いた。
工藤蓮華と読めない人のために「くどう れんげ」と隣に書いた。

「はーい、入ってきていいわよ！」

先生が教室のドアに向かつて話しかける。

転校生、工藤蓮華は小さな手でドアを開けて、「コシコシ」とはいって
きた。

「ク、工藤蓮華です。よ、よろしくお願ひします。」

「よ、よろしくー！」

男子たちは顔を赤くして一斉に言ひた。

なにせ、蘭が小さい頃ですからとてもかわいいのである。

女子の半分が「よろしくー！」と言つていたが、もう半分のほうは
嫌味のような目つきで蓮華を見つめていた。

「なんかさあ、かわい子ぶつてない？」

「うんうん」

「江戸川君さえいてくれればなあ…」

「そうそう。江戸川君がいなくなつてからさあ、私たち相当変わつ
たよね？」

「そりいえば、少年探偵団……とかいつたつけ？」

「ああ、の人たちね。」

グループの人気が一齊に元太、歩美、光彦を見る。

視線を感じたのか、歩美がそのグループのほうへ目を向けた。
しかし、そのグループはフンッとそっぽを向いた。

「江戸川君にもう一度会いたい…」

「ええ」

グループはそんな会話をして授業に取り組んでいった。

休み時間になると、蓮華の周りは男子でいっぱいだった。

「ねえ、好きな色は！？」

「赤だよ？」

「好きな動物は？」

「たいへい、全部好き。」

「むじうの学校に友達いた？」

「えーっと…いたかな…」

そんな質問攻めに蓮華はサラリと答えていった。

しかし…

「じゃあさ、蓮華ちゃんに好きなこいだ？」
「好きな人？」

いたよ'うな
…

いなかつたよ'うな
…

一緒にいたよ'うな
…

あれ?
…

思い出せやうなのこ
…
思い出せない。

そして、お兄ちゃんの顔が浮かんでくる。

ビーハー…?

「え? ちやん? ？」

蓮華ちやん…」

ハッ…

気が付いたら皿の邊に立って見たいつあるよつた顔の子がいた。

「あなたは…」

(- - ちゃん! いじうか。)

(- - おねえさんはーーお兄さんのこと好き?)

(- - 君のこと好き?)

なんだろ… 今の…。

「私の名前は、吉田歩美。あなた、蘭お姉さんに似ているねー。」

「確かにそうですね!」

「蘭お姉ちゃん知ってるか?」

「蘭…お姉ちゃん?」

聞いたことある… いいえ。私の本名。

工藤蘭。

「どんな人?」

「毛利蘭と言つて、すつごく美人さんなの。」

「新一兄ちゃんの恋人だよ!」

「新一…お兄ちゃんの?」

「そう!蓮華ちゃんが大人になつた感じ!」

「 もう… なんだ… 」

新一お兄ちゃんの恋人さん…

あつてみたい…

ひつて、私の生活は一週間過ぎて行った。

帝丹小学校にて（後書き）

感想待つてます！

久しぶりの再会

「工藤君、これをのんで。」

志保が新一に薬を渡す。

その薬は名無しのあの薬。

新一はわからないままで志保によつて飲まされてしまった。

(うあ…)

新一は心中で悲鳴を上げてその場に倒れた。志保はそのまま倒れさせたままにして、新一の様子をうかがっていた。

数時間後

「ン……？」

「こ、こ、こや…俺の家だ…」

蘭は？

「工藤君」

「富野？」

「蘭のことだけど。」

「蘭に何かあつたのか！？」

「いい？今からいうことは受け入れることはできないかもね。蘭さんはあなたの妹になつたわ！」

「はあ？蘭は俺の彼女だつーの！」

この会話で分かつただろうつか？

新一は志保が解毒剤を飲ませたおかげで元の正常に戻ったのだ。

「もうすぐ蘭が返つてくれるわ。」

数十分後・・・

ガチャツ

「ただいまーー。」

なつかしみのある煙が工藤邸に響き渡った。

「蘭…？！」

新一は半信半疑のまま玄関へ向かつた。

そこには小学生のいるの蘭がランドセルをショットて玄関に立つていて、そのだつた。

「蘭ー…どうして…」

新一は何がどうなつてこぬのかわからず、ただあたわたしているだけだった。

「お兄ちゃん？」

「はあ？ 蘭、どうしたの？」

新一は言葉を失つた。

蘭は新一の妹と勘違いしている。

「工藤君、ちよつとい。」

志保は無理やり新一をリビングにつれて今までのことを話した。

「そう……だつたのか……」

「工藤君、蘭はあなたのことをお兄さんと思っているわ。これ。」
志保がカプセルを新一に預けた。

「これ……蘭があなたのことを兄とは思つ薬の解毒剤。」

「APT-X4869のは?..」

「一ヶ月で終わるわ。そうね、あなたもAPT-X4869をのんで。

L

- 1 -

魔人をもてなす! (?)

二三

なにか人と食してね

元集日本之文全集

5-1

何？

「これ、飲んでくれ。」

卷之二

レシタリ

「ルーラン...」

蘭は水とともにその薬を飲んだ。

(ニヤ……なんか……ニヤああああああああああああ……)

蘭はその場に倒れ数時間の眠りについた。

数時間後、蘭は田覚めると自分の体に異変を感じた。

高校生のはずがなぜか肌がふんわりしていた。

田の前を見てみるとそこには「ナンガ」がいた。

「ハ、ナン君! ?」

そんなはずはない。

「ナン=新一
なのだ。」

なのに…どうして?

「コナン君……どうして……こういうが、私……」

「蘭、俺たちは小さくなつたんだ。」

「解毒剤は？」

「いや、一ヶ月間かかつて戻るらしい。」

「よかつた。」

「お前は、上藤蓮華。おれは江戸川コナン。」

「じゃあ、よろしくね、コナン。それと、どうせ、志保が作つたんでしょ？」

「正解。」

新一の言葉に蘭は浅いため息をついてコナンに抱き着いた。

「わっ…。」

新一、こちもコナンはこきなつのことで驚いた。

「コナン君に会えた・・よかつたあ…」
蘭の目に涙がいっぱいだつた。

「コナンは優しく蓮華を包んで揚げた。

その後、先ほどのことおを大阪カップル、江古田高校カップル、園子に伝えた。

久しぶりの再会（後書き）

感想待つてます！

江戸川コナン、再登校

「コナン、行こうよ!」

「つく…よく教科書とか残つてたよな…」

今日から新一は江戸川コナンとして小学一年生として帝丹小学校に通う。

もちろん、蘭も一緒だ。

蘭、蓮華はコナンもいることにより、安心感があった。

「コナン、歩美ちゃんたちに会いたかったんでしょ?」

「まあ… そうだな…」

コナンは久しぶりに会えるといつ気持ちでうれしそうないやないうな複雑な気持ちになっていた。

帝丹小学校の登下校の道を歩いていると少年探偵団が2人のもとこやってきた。

「蓮華ちゃん…」

「蓮華…?」

「蓮華ちゃん…?」

みんな蓮華のほうを向いていたが、蓮華の隣にいる男の子を見た途端、彼らは確信した。

「…コナン君…(コナン君) (コナン君)…」

江戸川コナン、一年前に帝丹小学校に通っていたが、一年後、すぐに姿を消した。

灰原哀とともに…

しかし、歩美が蓮華とコナンが一緒にいるのに目を向ける。
どうやら、蓮華をライバルだと思つたらしい。

「蓮華ちゃん、コナン君と知り合って？」

「え…えーっと…」

「友達…って言つたほうがわかりやすいかな？」

「ふうーん…いつ出会つたの？」

「へ？ああ…一週間ぐらい前だつたかな？」

嘘

本当はずうつとまえから。

幼馴染だから17年間ずつと一緒にいる。

2人は全然違うことを話している。

しかし、それが歩美にとつては好都合だつた。

(蓮華ちゃんより…歩美のほうがよくコナン君のこと知つてゐる。)

そう思つた歩美はコナンにいきなり抱きついた。

「コナン君ー会いたかつたよおー！」

一年生になつた歩美はこつこつ計画を立てられるようになつた。

コナンが今でも好き。

大好き。

自分を守つてくれる人。

だから…だから…

蓮華には負けられない、そういうおもいが歩美の心を換えて行つた。

「お、おい、歩美ちゃん!」

コナンは嫌がつている。

それを見た蓮華が

「歩美ちゃん、コナンが嫌がつてゐるよ、離してあげたり。」
と優しく言った。

『コナン』と『コナン姫』

歩美はその邊に氣づいてしまった。

たつた一週間の付き合いでビヒリして呼び捨てなのか。

コナンは嫌がつてないのか?

そう思つた時、歩美はすぐさま泣いてしまつた。

「う、ウハええん……！」

「あ、歩美ちゃんー?」

「歩美?」

少年探偵団とコナンと蓮華はこきなり泣き出した歩美にあたわたしていった。

「とにかく、落ち着かせよー。」

蓮華はそういうなり、歩美的手を取つて学校へ走つて行った。

学校に着くと、2人が走っているので見る人はすぐ振り返りながら登校していた。

2人は走って保健室へ行くと、保健の先生が優しいまなざしで歩美が泣きやむのを待っていた。

蓮華も同じだつた。

蓮華は、体が小さくても心は高校生。

面倒見のいいお姉さんなのだから優しい目をして歩美を見ていた。

「工藤さんつたらなんだか高校生に見えるわね……」

「え？」

蓮華はギクッと思いながら一生懸命違うと言つていた。

保健の先生は「はいはい」と優しく言つてくれた。

先生の年代は50。

おばさんなのでみんなから好かれている。

そんな会話をしているうちに歩美が泣きやんでいった。

すると、歩美はいきなり蓮華の腕を引っ張つて

「私…蓮華ちゃんに話があるんです…つすみませんでした…つ

半ば泣いていたが先生は不安がらず、「わかりました」といった。

歩美が蓮華の腕を引っ張つて人気のないところに連れていくと同時にチャイムが鳴つた。

蓮華はやばいと思ったが歩美がかまわず話し始めた。

「蓮華ちゃん…歩美はコナン君のこと好き。」

「歩美ちゃん…」

「蓮華ちゃんはどうなの？歩美、蓮華ちゃんのことはよく知らないけ

ど、蓮華ちゃんのこと、ライバルだつて思つー。」

「私も好き…大好き！コナンは私を命がけで守つてくれたし…」

「それだけ？それだけで好きになつたの？」

「それだけ…つてわけじゃないけど、コナンの全部が好きだな…」

「え…？知つてゐるの？コナン君の全部を…」

「さあ…あいつのことば全部知つてゐるつもり。」

蓮華はそういうことにひつひつ笑つて歩美の手を引き、教室へと向かつた。

(蓮華ちゃんのばか…)

恭美はやつと思いつと同時に蓮華を階段のところへ突き飛ばしていた…

江戸川コナン、再登校（後書き）

感想待つてます。

事件

「キヤ・・・」

蓮華は小さな悲鳴を上げた。

それはその場にしか聞こえないような声。

蓮華は氣を使つた。

本当のところ、大きな声を出しているところだが、大声を出したらみんなが来てしまつて歩美に被害がかかる、そつ思つと蓮華は静かに田を閉じた。

スローモーションのように蓮華は下へ下へと落ちて行つた。

「蓮華ちゃんの…せいなんだから…」

歩美はやつこつなり蓮華をそのままにして、その場を去つて行つた。

「歩美…ちゃん…」めん…ね…」

小さくほほ笑むと蓮華は田を閉じたまま意識を失つた。

蓮華一人、会談の一一番下で倒れていた。

歩美は走って教室へ向かつと歩美的計画は始っていた。

「先生！大変なんです！蓮華ちゃんが…つ蓮華ちゃんが…・・・」

歩美は演技で大変そうに言つた。

「蓮華がどうかしたのか！？」

一番最初にいつたのはコナンだった。

歩美はそれに傷ついたがそれを隠して事情をすべてコナンに話した。

コナンは事情を聴くと走つて会談へ向かつた。

「蓮華！…！」

コナンは蓮華に近づくと頭から血を流している蓮華がいた。

「おー、しつかりしろー…蓮華ー！」

「…し…新一…？」

「蘭…よかつた…今すぐ保健室に行くぞー！？」

「「めんね…」」

「ナンは蓮華をおんぶすると走つて保健室へ向かつた。

保健室では大騒ぎとなつた。

「蓮華ちゃん、誰かに突き飛ばされた覚えは？」

「…」

蓮華は答えようとしない。

歩美のせいにすれば歩美が苦しむ。

「私が…勝手に転んでしまつただけなんです…。」

「本当なの？」

「はいっ…そうに違ひないです。」

「そう…よかったです。」

先生は安心して蓮華の話を聞いていた。

しかし、蓮華は知つていた。

歩美が自分をつき落とし、殺そつとしたことを…

「蓮華！大丈夫か？」
「うん！全然平氣！」

蓮華はにっこり笑つてそついた。

捜査開始

しかし、コナンは誰かが蓮華を突き落したのだと確信していた。

たしかにドジっぽい蓮華だが、階段から落ちてもそこまで大量の血が出ることはない。

病院は行かなくても大丈夫と言っていた蓮華だが、やはり痛そうだ。

(おかしい…)

コナンはそう考えていると一人の少女にぶつかった。

「あ……」め……？！

「あら……」

「灰原？！」

そう、そこには宮野志保のはずの灰原哀が立っていた。
コナンは何が何だか分からなくなつて頭が混乱寸前だつた。

「ごめんなさいね、驚いたでしょ？」

「驚くも何も、どうして…」

「工藤君、説明はあと。蘭が階段から落ちたんですってね。」

「あ、ああ…」

コナンは哀の言葉に少し言葉が詰まつた。
ほんとうは違う、そういうふうに思つた。

「あら…なんだか違うみたいね。
哀はわかつたようだ。」

しかし、コナンは半信半疑のまま哀に自分の意見を話した。
「たぶん…蘭は何者かによつて突き落とされたんだ。」

「蘭は……知つてゐるんでしょう？」

「多分……な。」

「どうしてそれを言わないのかしら？..」

「底つてゐるんだろ……あいつ、そういうお人よしだからな……」

コナンの言葉に哀は同情した。

確かにそうだ。

蘭は人が苦しむ姿を見たくない。

だからこそ、命を張つてもその人を守り抜く強さがある。

そういう優しさは時に、憎しみを持たせてしまうのである……

「とにかく、蘭に会いに行くわ。確か……蓮華、よね？」

「ああ、そうだ。」

二人は急いで蘭のいる2・Bの教室に向かった。

「蓮華！」

「あ……し……じゃなくて……」

「哀でいいわ！」

「どうして……？」

「あなた、階段から落ちたらしいわね。」

「うん……なんかドジつちゃって……」

蓮華はテヘッと頭をこすつた。

でも、それは作っていると二人は同時に思つ。

蓮華は底つてゐる。

犯人をかばつてゐる。

そんな時コナンのファンらしき人がコナンに近づいた。

「コナン君！戻つてきててくれたのね！」

「わたしたちのコナン君！」

「キヤーーッ！」

「ナン」ファングループが「ナン」に抱き着いてくる。
しかし、それは蓮華への見せつけ。

「ナン」と仲が良いことによりそつやつての嫌がらせが蓮華を襲う。

「やめろよっ！…」

考え中だつたのか、「ナン」はいつもよりも不機嫌だつた。
しかも、この中に犯人がいるかもしれないというのに…。
しかも、最愛の蓮華、いや蘭が階段から突き落とされたのである。
ジッとしていられないはずだ。

「い、『ナン』君…？」

女子たちも当然の驚き。

今までに見せたことのない表情だつたからである。

「そりや そりや…『ナン』君は今、考え事してるんだから…。」

そういうのは歩美だつた。

そつやつて「ナン」に自分のほうを向かせよつとの作戦。

歩美が蓮華の目の前を通つた時、蓮華は悲しみと怖さの複雑な表情を見せたのを哀は見逃さなかつた。

「あー 哀ちゃん！会いたかつたー！」

歩美はそういうなり哀に抱き着いた。

哀は少し力を込めながら抱きしめてあげた。

蓮華はそれを見ると、そつと教室から出よつとした。

「ナン」の合図とともに哀は走つて蓮華を呼び止めた。

「蓮華、ちょっと話があるわ」

「哀…」

蓮華は哀に手を引つ張られ、廊下で話を始めた。

「单刀直入に言つけど、あなた、もしかして吉田さんに突き落とされたんじゃないの？」

「何を…つていうか、どうして私が突き落とされたつて知つてるの？」

「突き落とされたの？」

「あ…っ」

蓮華は口走つてしまつた。

自分が何者かに突き落とされたとこつことを

「突き落とされたのね…」

「それよりも、どうして志保が小さく？」

「これは48時間の薬。一日間この学校にいるつもりよ。それで、久しぶりに学校に立ち寄つたら大騒ぎになつてたから先生を呼び止めて聞いてみたつてわけ。」

「どうして？どうして小さくなつたの？」

「実験よ。48時間…薬が切れるか切れないとつていうね。」

「そう…」

蓮華は少し不安げの顔をして哀を見つめた。

「ん？何？」

「もし、今薬切れちゃつたらどうするの？」

「大丈夫、24時間は確實だから。」

「よかつた。」

蓮華は安心感でいつぱいになつた。

しかし、どこか複雑である。

やはり、あの階段事件である。

「それで？誰がやったの？」

「・・・言えないよ...」

「言えないってことは友達ね。」

「え...」

「あなたは誰にでも優しくするけど、いつときは言つわ。ただし、知らない人をね。」

つまり、クラスメートと考えられるわね。そして...そこからあなたが吉田さんとすれ違つた時の表情。吉田さんが関係あるみたいね...」志保の推理は当たり特等だった。

蓮華は何も言えずただ、うつむいているだけだった。志保は痺れを切らし、どうにか吐かせようとした。

「蘭、お願い、あなた...自分を傷つけた人を許せるの！？」

「...」

「...」
「藤君...許さないわ...あなたを傷つけた犯人を...」

「...」

「黙つてないで...本当の『』と書いて...私はあなたが苦しんでいる姿が一番嫌なの...！お願い...書いてよ、蘭。」

「...新一が...おこるでしょ...？」

「蘭...？」

「新一が...その人のこと許さないでしょ？」

「そうね...そうかもしないわね...」

「だから言えない！新一が...おこるのが一番嫌！その人がかわいそ
うだし...新一に余計な心配かけちゃうもん...」

「蘭...」

蓮華の言葉に哀れ何も言はざることはなかつた。

そのまま、犯人の名前は出るところなく、時は過ぎて行つた。

検査開始（後書き）

感想待つてま～す！

コナンは蓮華が付き落とされたとみられる、一階の階段の真ん中にいた。

きつといこで突き落とされたはずだ。

コナンはそういうと、どこからか、虫眼鏡を出してそつと階段のところにあつた上履きでこすつたような跡を見つけた。

学校の怪談ではたいてい、児童がけがをしないように角の所にカバーミたいなのをしてある。

そこにこすれたような青いかすとともに跡があつた。

「やつぱり上履きのものだ。かずかだけど、ゴムっぽいのがる。」

「やつぱり…この学校の児童みたいね。」

「ああ…青い上履き…そう、俺達の学校では上履きのつま先の部分が青くなっている。たぶんここで、蓮華は突き落とされたんだ。これは…犯人のものか、蓮華のものか…。」

「可能性としては蘭のほうが高いはね。」

「そうだな、突き落とされたときこすれたものか、何らかの原因に犯人がつまずいたか…」

2人して一生懸命考えていた。

蓮華、いや蓮華のことだから、2人は一生懸命になるのは無理ないだろう。

「蓮華…吐かなかつたわ。」

「やつぱりな。蓮華はそういう奴じやないからな…」

「…あなたが怒るからつて…」

「へ?」

「あなたが怒鳴つて怒るから…犯人に怒鳴り散らすから…蓮華はそれを見るのが一番嫌なんだつて。」

「…」

「蓮華は…あなたが大好きでしかたないのよ。あなた、付き合つて
るんでしょう？」

「ああ、俺も…愛してる。」

「そうなら…蓮華が思つてこない」と、理解してあげた。「
でも…」

「あとは、あなたの勝手にして。犯人…わかってるはずよ? 証拠は
なくても…私にもわかつてるわ。」

哀はそういうなり、その場から立ち去つて行つた。

窓から見える、太陽に光がコナンを照らし出す。
すべてには空が知つている。

でも、しゃべりはしない。

だから、自力であぶりだすのだ。

最愛の人を傷つけた、最低な奴を…。

「コナンぐーん!」

そこへ、歩美がコナンのもとへ走つてきた。

「あ、歩美ちゃんか?」

「コナン君ー蓮華ちゃんは?」

「…まあ?」

「そつ…」

「なあ、歩美ちゃん。蓮華を見つけた時、どこにいた?」

「どこって…保健室よ。」

「一階から落ちたんだぜ? 蓮華は歩美ちゃんを迎えに行つたんだ。
歩美ちゃんと一緒に教室行つたときに蓮華が転んだとしても、落ち
たのは人間では速いスピードだ。しかも、どうして悲鳴を上げなか
つた? そして、たくさん呼びかけるはずだ。少年探偵団だろ? それ
ぐらいはできるはずだぜ?」

「や、そんな暇なかつたの。とにかく、教室に行こつて…」

「どうして、会談のすぐそばにある、特別学級の教室にいる先生に

「いわなかつた？」

「い、いなかつたのよ……」

「いや、いたや。先生に確認したところ、その時は児童と折り紙をしてたそうだ。音は聞こえたが、あまり気にしてはなかつたらしい。」

「何が言いたいの……？」

「つまり、歩美ちゃんが蓮華を突き落としたんじゃないかつて。」
コナンの言葉に歩美は言葉を詰まらせた。

確かにコナンの言つとおりだ。

特別学級の先生に言つまうが一番速くて一番保健室に近いのに、どうして、一階にある、2・Bの教室までいったのだろうか。

「し……証拠は？！私がやつたっていう証拠は？」

「歩美ちゃん……蓮華がいるよ。」

「……」

「蓮華……歩美ちゃんとすれ違つた時、哀しいような怖そうな顔してたんだ。あいつがそんな顔するのは不安な時、そいつに何かされた時だけだ。俺は、歩美ちゃんを仲間だつて思つてたぜ？」

「私だつてそう思つてるもん！だからそんなことあるはずないじゃない！」

「蓮華が……犯人のことを言つたら？」

「……」

「蓮華は……俺が頼めばいつてくれるよ……」

「コナンは静かな声で言つた。

歩美は荷も言えず、ただ、黙つてうつむいているだけだつた。

「蓮華ちゃんが……憎かつたのよ……蓮華ちゃんなんか……いなくなつちやえば……いなくなつちゃえばよかつたのよ……。コナン君と親しい蓮華ちゃんが、コナン君のことを呼び捨てにしている蓮華ちゃんが、コナン君のことを知つてている蓮華ちゃんが、大大大大嫌いだつたのよお……蓮華ちゃんより、私のほうが先に出会つたんだし……。」

「先に出会おうが、俺は……蓮華を愛してるよ……」

「コナン君…！」

コナンの言葉に歩美は動搖を隠せなかつた。

コナンは少し顔を赤くして天井を上げた。

歩美にはどう見えてものろけにしか見えないことだつた。

「悪いけど、蓮華はおまえが犯人とはいってないんだぜ？」

「え？」

「蓮華は言わないぜ？そういう優しさがあるからな。」

「どうして…？私悪いことしたのよ？」

「蓮華はそういう奴なんだ。」

「バカだな…」

歩美はそういうことじめんなさいと泣いて謝り、蓮華の居場所を聞いて、謝りに行つた。

蓮華は歩美の言葉に笑顔で受け止めた。

そして、

「これからも仲良くしようっ！…歩美！」

といつたのであつた。

歩美には考へられないことだつた。

怒られるかと思つていたはずが、仲良くなろうと笑顔で言われ、ついには呼び捨て…。

歩美は泣きながら笑顔でうなづいた。

ここでの、一つの友情が芽生えた。

(蓮華ひやんつて……蘭お姉さんによ似ていの……)

推理（後書き）

歩美ちゃん…気づいてしまうのか？！

次回は明日！

感想待つてます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8299z/>

兄妹

2011年12月28日20時53分発行